
熾烈戦隊リベンジャー [R]

高浜ゆりえ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

熾烈戦隊リベンジャー [R]

【Nコード】

N2504C

【作者名】

高浜ゆりえ

【あらすじ】

人の命は明日への果てしなき可能性である。その可能性を否定し、地球に終末をもたらす存在・パレートを倒すため、五人の戦士達は超人として生まれ変わった。リベンジャーは戦う、例えばそれが血を吐きながら続ける悲しいマラソンであったとしても、命を守るためには戦うしかないのだから――

これまでのあらすじ（前書き）

前作を読まずとも五分で分かる、今までの熾烈戦隊リベンジャー。

これまでのあらすじ

【これまでの、リベンジャーのあらすじ】

精神生命構造体、パレート……

それは異次元に住む悪意の塊、世界に終末をもたらす存在である。

数千年前の戦いで実体を失ったパレートは精神だけの状態で再び復活し、その力で様々な星々を滅ぼし、難民となった星人を配下に勢力を拡大していった――

そしてパレートは、高度な科学力と凄まじい技術力をもった人類の住む惑星・地球を狙っていた――

【熾烈戦隊】

熾烈戦隊とは、銀河連邦からの使者である宇宙人・【冷泉裂子^{れいせんさきこ}】が地球の一大・石動財閥^{いするぎざいばつ}の協力を経て作り上げた防衛組織である。

熾烈戦隊の五人の戦士・リベンジャーは超人と呼ばれる遺伝子を強化したボディに自らの記憶と心を入れ替えた存在であり、それぞれ違った特殊能力をもち鍛えれば鍛えるほどに強くなる特性をもっている。

ファイヤーレッド・不堂断児^{ふどうだんじ}は家族と共にパレートに殺されていた過去をもつ青年である。

断児は冷泉裂子の手によって超人として復活し、熾烈戦隊の仲間達と共に役半年間の間戦いに身を投じていた――

そしてその戦いの中で悩み、苦しみ、ついに新たなる戦士、バーニングファイヤーへと進化をしたのであった――

そして今、熾烈戦隊と、遂に実体を得たパレートとの戦いは最終局面を迎えていた――

【メインキャラクター紹介】

【不堂 断児】

ファイヤーレッド及びバーニングファイヤーに変身する青年、正義感が強く根が真面目だが、時折柏木以上の天然ボケが入ることもある。

また甘党でシスコンの気があり変な物を集めるという、まだ表出していない変な面がある。

【ファイヤーレッド】

1日に一回だけなら復活できるという特殊能力をもった超人。車五台同時破壊や、落下する丸太を破壊するなどの激しい特訓により、復活能力を利用したサンシャインオーバーヒートや、ファイヤーキックなどを拾得した。

基本携帯武器は蛮刀のような形状の長い刃をもったDブレード。

【冷泉裂子^{れいせん さいし}】

銀河連邦により派遣された宇宙人で、石動財閥と結託し防衛組織・熾烈戦隊を作り上げた。

戦闘に赴く際には激しい敵意をむき出しにする女性であるが、それは過去に彼女の住んでいる惑星がパレートに滅ぼされたからである。黒髪の長髪で切れ長の瞳をもち、普段は白衣を纏っており保健室の先生のようなのである。

好きな色はピンク色でデイベア収集が趣味という秘密があるが、その秘密を知った者は恐ろしい目にあう。

破壊砲を胸から放射できる超人・オーシャンブルーに変身する。

【オーシャンブルー】

胸を左右に開放させ、内部から破壊砲を放射するという特殊能力をもった超人。

中・近距離からの攻撃が得意。

武器は収縮自在の蛇腹の剣・イビルデイベイザー。

【北崎 忍】

忍者の村で育ったが、その村がパレートにより滅ぼされたために冷泉裂子の元で超人に生まれ変わった青年。

短い金髪に快活な笑顔が特徴で誰とでも気さくに話すが、少し負けず嫌いで悪戯も多々起こしたりするのが短所。

熾烈戦隊に入った当初から南条とは苦楽を共にしてコンビを組んでおり【二人はブラザー】という決め台詞を多様していたが、最近では断児の実力も認めるようになり、熾烈戦隊の皆を家族のように思うようになっていく。

実体分身能力をもつ超人・ホレストグリーンに変身する。

【ホレストグリーン】

【南条 真琴】
なんじょう まこと

高校生の時に一家をパレートに惨殺され、戦いに身を投じる決意を固めた青年。

短い赤髪と長身が特徴的で、無口で人見知りが激しいが本当は仲間思いの優しい性格である。瞬間移動能力をもつ超人・シャドウブラックに変身し、銃を主体に戦う。

【アイン】

元々はアインバイカーという人型に変形バイクであったが、体を一度破壊されたために人工知能を超人の体に移植した超人。

見た目は銀髪の青年で冷泉裂子に好意を寄せているが、彼女をサポートする役割に徹している。しかし、妄想が暴走する事が多々ある。特殊能力が未だに不明な超人・ホワイトウィンドに変身して戦う。

【柏木 棗】
かしわぎ なつめ

石動財閥に所属する天才科学者で、超人や武器などの開発者。

スラッとした体で、長い金髪をポニーテールにしてまとめている。

天然ボケ的な性格であるが、生身で少年を助けようとするなど、人を守るという気持ちは人一倍強い。

【藻墨 宗一郎】
もずみ そういちろう

かつて地球でパレートと戦った事のある宇宙人で、裂子と同じく銀河連邦の使者。熾烈戦隊の長官であるが、ピンチの時以外は不在の場合が多い。

歴戦の勇士であり厳しい表情の時が多いが既に熾烈戦隊のメンバー達の実力は認めており、特訓などの日課は殆ど冷泉裂子に任せている。

【火野タケシ（ひの たけし）】

パレートの幹部・灰帝絶竜エンドラスに知り合いを吸収されてしまったために、戦う事を決意した中学生の少年。

――

熾烈戦隊の戦いは新たな段階へと進化していく。
更に強く、更に熾烈に――

【次回予告】

ついに復活したパレート。
そして対峙するファイヤーレッド。

一方、最後の幹部エンドラスの猛攻をリベンジャーは新たな武器で迎え撃つ！

タケシ少年は――ユウト少年を助けることができるのか？！

【次回 熾烈戦隊リベンジャーR】

【第一話 その名は飛蝗王】

最後の戦いに――リベンジャークラッシュ！

これまでのあらすじ（後書き）

作者「こんにちは、熾烈戦隊リベンジャーRの作者の【ゆりえ】です、ペンネームを変えましたとです」

アイン「まあなんで女の名前をペンネームにしたのかは突っ込まないとして、オイ作者、このページの説明をした方がいいんじゃないのか？」

作者「ああ、そうでした……ここはあとがきであり、作者とアイン君を始めとする登場人物のミニコントの場です」

アイン「コントだったのか……にしてはお粗末な気がするが」

作者「最近オチが無いんだよね」

アイン「あんたのせいだろがいッ！つか、リベンジャーってかなり長かったから、新バージョンになっても初めての人には展開が分からなくないか？」

作者「いやぁー大丈夫ですよ、そのためのあらすじなわけで寿司、

登場人物の皆さんが頑張ってくださいから」

アイン「俺ら任せかい!!」

作者「リベンジャーRでは旧リベンジャーよりもう少し、キャラクタ―に味付けが加わるかもしれないです、断兎の真っ裸とか、南条のメイド服姿とか……」

アイン「その系列でいくと……次は俺あたりが何か着せられそうだな」

作者「じゃあアイン君も真っ裸で」

アイン「二番煎じは死んでも嫌だッ!!」

プロローグ1 —接触—

冬の冷たい風が、生傷の癒えない体に染みる。

赤いコート越しに感じる、乾燥して冷え切った空気。

その空気の中でさえも、この街の人々は活気に満ちていた。

「平和だ——」

断兎は呟く。

まるで、今まで何事も無かったかのような平和な商店街。

魚屋、八百屋、本屋、ゲームセンター……一直線の道の左右に建っている様々な店から、活気だった声が響く。

「賑やかだな……ここはいつも」

断兎はすれ違う人々に目をやると、無数の絆創膏が貼られた拳を握りしめた——

「……………」

道行く人々は、まるで空気のように平和のなかで生きている。だが、この平和は脆くて儚い——

「だが……俺達は戦っている——平和を信じて」

握りしめた拳の力を抜いた断兎は一瞬だけ瞳を閉じると、静かに立ち止まった。

そのまま数秒間、断兎は人の流れの中で俯いた。

「——んッ？」

立ち眩みのようなものを感じ、我に返り瞳を見開く断児。

（俺としたことが——立ち眩みか？）

彼は——不堂断児とはパレートにより家族と自らを殺され、超人として生まれ変わった熾烈戦隊リベンジャーの戦士・ファイヤーレツドである。

日頃は地下の異次元にある熾烈戦隊の基地の中で特訓をしているのだが、休暇をもらった彼は今日は地上へと外出していた——

（しっかりしなくちゃな……これからの戦いは更に過酷になる、きっと今までより強い敵が現れる——）

まだ見ぬ敵を想像すると、断児の拳は少しだけ震えた。パレートが次々と送る刺客は強くなり、彼はその力に負けないよう、仲間と共に戦ってきた——

これからも、この道行く人達を守り抜けるか、いや——

「俺達が——リベンジャーが必ず守る」

握りしめた拳を開いた断児は決意を新たにして、再び歩き出した。その真横を一匹の蛾がひらひらと舞い、飛んでいく——

「それは、無理だよ——」

一瞬、断児の脳裏に響く声。

——まるで無邪気な少年のようなトーンの声が、その視線が見つめる

先の道行く人々の中から響いていた。断児は瞳を大きく見開き、周囲を見回した。

（なんだ、誰だ——誰だ！）

断児は声の主を探すために、人混みの中を駆け出す。

短い黒髪が揺れ、短い靴音が活気だっている街中を一直線に進んだ。

「ふふッ、君がボクを知らないわけがないよ——何故ならボクは」

無邪気な声が近くなっているのを断児は感じた、声の主は必ず近くにいる——直感した彼は立ち止まると、再び周囲を見回した。

「一体どこなん——！！」

叫ぶ断児は、周囲の光景を見つめて言葉を失った——

彼の周りの商店街は白黒に染まっていき、周囲の人間達の動きが、いや、全ての動きが止まっていたのだ——

「なんだこれは、時間が——止まっている！？」

そうとしか表現出来なかった。

断児の周囲の世界はビデオの停止ボタンを押したかのように停止し続けていき、音は自分の動いた時に発する音以外全くなかった——

「弱いよねえ人間で、体も、心もさ——時間を止めただけで動けな

くなっちゃうんだもの」

灰色に染まっていく空を見上げて眉を寄せた断児は、今度は背後から直接声が響いているように感じた。断児はジャケットから赤い携帯を取り出すと、周辺を見回しながらその携帯を操作する。

「くっ……熾烈携帯で通信ができない——何が起こっているんだ」

断児は仕方ないといった表情で、手に持った赤い携帯——熾烈携帯を白黒の空に翳した。

——熾烈携帯とはリベンジャーが使用する万能機械であり、緊急時にレポートや通信、そして今のように危険信号を発信することができる携帯である——

「危険信号だけでも——受け取ってくれ、みんな！」

熾烈携帯から甲高いアラームのような音が流れる。灰色の空に翳した熾烈携帯のモニターは赤く明滅し、四方に赤・青・緑・黒・白の光を放射した。

「みんなで来てもボクの前では意味ないよ——断児君」

断児は左側に並ぶ店の向こうから声が聞こえてきているように感じ、熾烈携帯をジャケットのポケットにしまった。そしてその言葉の内容が、断児の感情を逆撫でする。

「そんなことあるものか——リベンジャーは五人で一つだ!!」

断児は周囲を見回して叫びながらも再び駆け出し、八百屋の横道を走っていく――

停止したドラ猫などをよそに走り抜け、断児は交差点の前にたどり着いた――

「はじめまして、かな――ファイヤーレッド……不堂断児君」

交差点の中央には、一人の少年が立っていた。十三・四歳ほどに見えるその少年は赤く明滅する長髪をもち、全身に黒いマントを羽織っている。

「こ――子供?! いや、違う――子供ではない?!」

交差点の中に駆け込み、中央に立つ少年を数メートル前から見つめる断児。

普通の子供とその少年の違いは、瞳や表情から明らかな殺意や闘志が感じられていることであった。

そして停止した世界の中、交差点の周辺には車も無く人もおらず――非常に不自然なものであった――

「ふふっ、ボクもよく分からないんだけど――こんな姿なんだよね」

少年はその細い自らの手を見つめると、その手を見下すかのように瞳を細めて、鼻で笑った。

「お前は――お前は何者だ!?!」

怒りを露わにする断児。

何者だ――少年はその問いかけに答えるかのように口元だけで冷笑

を漂わせる。

すると少年の立つ灰色のアスファルトに、少年の背丈よりも巨大な黒い影がさした――

「ボク？鈍いなあ断児君、ボクは――パレートだ」

少年は、その幼い外見には不釣り合いな嘲笑を断児に向け、その瞳は赤く輝く。すると巨大な黒い影は地面から浮き上がり、少年を包み込む――

「…お前がパレート…ガガや、ブリッツ星人――今までの敵の親玉か?!」

断児は黒い影に包まれ、紫色の光を放ちながら変質をしていく少年を見つめる。

今まで戦ってきた幾多の敵――

それらを繰り出してきた悪の根源を前にして、ファイヤーレッドの右手は無意識の内に少しだけ震えた――

「そうだよ、ボクがパレート――」

黒い影により少年が変質をした姿。

無数の鋭い棘が生えた蟹の甲羅のような赤い外殻で包まれた全身。

頭は鎧武者のような形状をしており、殺意を放つ隻眼の瞳、左右から牙が生えた口。

そして蟹のもののような鋭いハサミが付いた左腕をもった怪人、それが少年の姿をしたものから変質をしたパレートであった――

『不堂断児！――貴様ら人間の絶対の敵だあああッ!!』

パレートの声が少年のような声から——大人のように低く、エコーの効いた断末魔のような声へと変わった——

左腕に生えた巨大な蟹のもののようハサミを振り上げパレートは駆け出す。

「速い——だが!!」

弾丸のように加速して迫り来る黒い影を前に、左右に手を開いた断児は両足を開き、アスファルトの大地を蹴って飛び上がった。

「エクステデターッ!!」

宙に飛び上がった断児は前方に一回転し、叫ぶ。
するとその言葉に反応し、断児の全身は真っ赤な炎に包まれた——

「不屈の闘志、ファイヤーレッド!!」

真っ赤な全身、ゴーグル状の瞳をもったヘルメットの姿が大地に着地し、素早く立ち上がる。

——断児は一瞬にして、超人・ファイヤーレッドへと姿を変えたのである——

「はぁッ!」

ファイヤーレッドは拳を握りしめ、迫り来る黒いパレートの首もとへと鉄拳を放つ。

「でエエッ!!」

炎を纏った拳の矢のような突き、だがパレートはその突きを右手をダイヤ型の盾に変質させて難なく弾いた。

「弾かれたッ?!」

腕を弾かれたファイヤーレッドは瞬時に背後に跳ぶが、パレートはそれと同時に巨大なハサミを振り上げて猛迫する。

『フンッ!!』

「ぐああああッ?!」

パレートが振り下ろした左腕のハサミに叩きつけられ、ファイヤーレッドはアスファルトを転げ回る。

「ぐっ——だが……この程度で負けるかッ!!」

満身創痍のファイヤーレッドは姿勢を直すとDブレードを握りしめ、パレートに向かって駆け出す。

パレートはハサミのついた左腕を振り上げると、自らに迫るファイヤーレッドを睨みつけた——

『甘いぞファイヤーレッド——ストップ!!』

——パレートが叫ぶと、一瞬にも満たない時間でファイヤーレッドはまるで写真に映し出されたかのように、完全に動きが停止してしまった。

時間を停止させるパレートの力が、ファイヤーレッドの体に及んだのである。

「——」

微動だにしないファイヤーレッドへと静かに歩み寄るパレート。

『どうしたファイヤーレッド——貴様の力はこの程度では無いはずだ! 貴様の見せた新たな力を見せてみる!!』

パレットは自分を睨みつけたまま停止しているファイヤーレッドに向かって叫び、左腕のハサミを振り上げる。

『さあ、どうする……デスシザーハンド!』

振り上げたハサミは大きく開かれ、膨大な量のエネルギーが紫色の火花を散らす。

そして踏みしめたアスファルトの大地は一気に砕け散り、パレットは舞い上がる破片の中を紫色の閃光となって一気に駆け抜けた。

『デiiiiiiiiッ!!』

振り下ろされたハサミによる強力な一撃が、停止したファイヤーレッドの胸に直撃する。

ファイヤーレッドは凄まじい衝撃を受けて停止状態が解除され、真っ赤な血と火花を散らしながら一気に吹き飛んだ。

「がああああッ?!」

吹き飛んだファイヤーレッドは道路脇にある二階建ての民家に叩きつけられ、壁にめり込んだ。

パレットはそんなファイヤーレッドへ左腕のハサミを向け、再び少しずつ歩き出した。

『さあ見せてみるファイヤーレッド……貴様の真の力を!!』

めり込んだ壁から剥がれ地面に落下するファイヤーレッド、受け身

もとれずに前のめりに倒れ、呻き声があがる。

「ぐっ……俺は——」

時間が停止した灰色の街の中で、血だらけのファイヤーレッドはそのボロボロの右手で、地面の砂と石を握りしめるのであった——

プロローグ1 ―接触―（後書き）

作者「どうも久しぶりです皆さん、作者です」

アイン「更新かと思ったら書き直しなのな」

作者「ごめんねアインよ――本当に忙しいの、就活」

アイン「なら書いてる場合じゃねえだろがい！はよハロー●ーク行
ってこいや！来年はニートマンになっちまうぞ！！」

作者「はいよー行ってきましたがな、では皆さん、また来年」

アイン「来年かあ……もうみんな知らない作品になっちゃうんじゃない
ねえか？」

作者「それでもいいモン」

アイン「うわっ、開き直りやがった」

プロローグ2 ―超闘神vs終末神―

―停止した街の中で、パレートと遭遇した不堂断児―

パレートの一撃を受け、変身が解除された断児は勢いよく地面に転がった。

体中に切り傷、擦り傷を作りながらも断児は闘志を持続させ、歯を食いしばった。

「ぐっ、俺はもう負けられない――」

断児の額から、真っ赤な血が流れる。

口の中に入る砂埃を吐き出した断児は地面の石と砂利を握りしめ、よろめきながらも壁にもたれかかる。

「そうだ――諦めないことが俺の最大の必殺技じゃないか」

自らに言い聞かせるように呟く断児、そして彼は傷だらけの手のひらで石を投げ捨てる。

投げ捨てられた石は、路上に転がり、動きを止める。

「エクス……テデター」

断児は一瞬にしてファイヤーレッドへの再変身を遂げ、そのゴーグル状の瞳でパレートを真っ直ぐに見つめた――

「俺は必ず勝って帰るんだ――みんなの所へ!!」

体の中から湧き上がる凄まじい金色の炎に包まれたファイヤーレッド、その姿は緑色の輝きを放ち、変質をしていく。その叫びと共に放たれる膨大なエネルギーに威圧され、パレートの

足は無意識の内に半歩だけ後退した――

『そうだ……貴様はそうして何度でも立ち上がる、だからこそ――倒さねば!!』

言いかけて、プレートは瞳を細める。

そして、光に包まれるファイヤーレッドを睨み付け、左腕のハサミを開閉させ、右腕の掌を握りしめた。

「フンッ!」

ファイヤーレッドを包んだ金色の炎は銀色の輝きと融合し、一気に爆発した――

「力と技と心の超闘神――」

ファイヤーレッドは姿を変え、爆煙の中から現れた。

Vの字に近い形の瞳。

黒いバツクルの装備されたベルト、銀色の装甲が追加された肘と膝、胸に輝く純白のプロテクター。

そして、それらを纏った真っ赤な全身をもった戦士……バーニングファイヤーへと変わった彼は、アスファルトの路上へ静かに一步全身した――

「バーニング――ファイヤー」

バーニングファイヤーは脚を広げ、右腕の肘を曲げ、左手をそこに添えて見栄を切る。

すると全身から凄まじいエネルギーが放射され、立ちはだかるプレートを圧倒する。

『ぐっ……その力——見せてもらおう！不堂断児！』

パレートはハサミで真っ直ぐにバーニングファイヤーを指差す、その全身からは今までの刺客——ブリッツやガガを凌駕する紫色のエネルギーが一気に放出された。

しかしパレートは絶対的な勝利を確信しつつも、バーニングファイヤーの底知れぬ力を前に、焦りのようなものを感じていた——

『そして我は——それを打ち破り、人間を否定する！』

止まる世界の中心で、パレートはハサミの付いた左腕を振り上げて駆け出す。

一陣の風を巻き起こし、その怒号が無音の街に響く。

『ヌウウウウツ！！』

迫るパレートを前に、バーニングファイヤーは地面を踏みしめて拳を構える。

「バーニング——ナックル！！」

バーニングファイヤーの拳とパレートのハサミがぶつかり合う。

その刹那、二人の踏みしめたアスファルトは粉々に砕け、宙を舞う。

『——ぐうッ！！』

バーニングファイヤーの一撃を受けたパレートは足で地面を擦りながら背後に後退する。

——パレートの焦りは正しかった。

今のバーニングファイヤーは既に自分と同じほど——もしくはそれ以上の力を獲得していたのだ——

パレートは認めたくなかった、そんな力を発現させる人間の力など

——

『バーニングファイヤー……まさか——ここまでとは!!』

叫ぶパレート、そしてファイヤーレッドは流れるような挙動で両腕を真横に動かし、腰を落とした。

「絶望は希望を打ち消すことなど出来ない……パレート、この勝負——貴様の負けだ!」

バーニングファイヤーの言葉を、パレートは焦りを見せながら即座に否定する。

『ぐッ——そんなことは無い!! ストップ——』

——焦るパレートは怒りを露わにする、そして左腕を振り上げると、拳を構えるバーニングファイヤーの周囲を紫色のエネルギーが囲い、彼の時間を停止させる——

「——」

——腰を落とした姿勢のまま全く動かないバーニングファイヤー。パレートは左腕を振り上げ、そのハサミを中心に紫色のエネルギーを収束させ、駆け出した——

『これで終わりだ——バーニングファイヤー!!』

あらゆる物体を原子に還元するエネルギーを纏ったハサミがバーニングファイヤーに迫る。

その膨大なエネルギーがバーニングファイヤーに直撃し、その体を一気に砕く——

『—————ぐうウツ?!』

——ことは無かった。

腰を落とした姿勢のバーニングファイヤーは迫るハサミを、回し蹴りで一気に弾き返す。

『馬鹿な——俺のストップが効かないだど?!』

時間を止めた筈のバーニングファイヤーの予期せぬ反撃を受け、パレートは初めてよろめいた。

「パレート——やはりこの勝負、俺の勝ちだ!!」

『ぐっ——何をッ!?!』

回し蹴りの勢いで立ち上がるバーニングファイヤーは高らかに宣言し、パレートを一瞥する。

そして、静かに左腕を振り上げる。すると、時間が停止した灰色の空から、一瞬にも満たない時間で光り輝く何かが飛来した。

「使わせてもらおうよ、柏木さん——」

飛来した1メートルほどの重厚な物体を掴み、バーニングファイヤーはそれを構えた——

「重合身剣——エレメンタルリベンジブレイカー」

それは——剣であった。

全体的にメカニクな感じがする重厚な剣は金色の装飾が施された深紅の鍔をもち、バーニングファイヤーが握りしめると、無限を意味する記号の刻印が刻まれた銀色の両刃の刀身が輝いた——

「ファイナル——イグニッション!!」

叫ぶバーニングファイヤーは光り輝く謎の剣・重合神剣エレメンタルリベンジブレイカーを振り上る。じゅうがっしんけん

するとバーニングファイヤーの胸の中央に切れ目の入ったプロテクターが左右に開放され、右と左の二つに分かれたプロテクターはそれぞれの肩に移動する。

そしてプロテクターが保護していた胸の中には、縦に何層にも重なった銀色の放熱板が埋め込まれ、背中からは黒いマントが発生した——

「この一撃が——今の俺の全てだ!!!!」

エレメンタルリベンジブレイカーを横に構えながら、再び腰を落すバーニングファイヤー。

その金色の剣圧にアスファルトにヒビが入り、背中のマントが大きい

く靡いた――

その姿を睨みつけるパレートは静かに頷くと、全身から紫色のエネルギーを。

『ならば我も……今の私の最大の力で貴様の全てを否定する!!』

パレートは全身を震わせ、紫色に輝くエネルギーの全てをハサミに収束させると、そのハサミは左腕から分離し、細長い両刃の剣へと変質した――

『終末剣――ギガバニツシユカリバー!!!!』

パレートが握りしめたギガバニツシユカリバーは無数の怨念の絶叫のような音を発生させ、紫色と黒の莫大なエネルギーを放つ。

バーニングファイヤーとパレートの放つ二つの膨大なエネルギーは周囲の建物や地面を歪ませ、今にも爆発しそうであった――

――

歪む街の一角にあるビルの上から、そんな二つのエネルギーを見つめる男の姿があった――

「ついにパレートを越えるものとなるか――超人、しかしそれだけでは――また、あの歴史が繰り返される――」

ビルの屋上のフェンスの外側に立つ男は二十代後半のような凛々しい顔をしており、長髪を後ろで束ねていた。

そして彼は、胸の辺りに緑色に明滅する百合のような花を添えられた小麦色の生地民族衣装のようなものを着ており、何かを悟り

きったかのような表情で俯いた。

「人が【それ】を超えるのならば——私がすべきことは一つだ——」

男は民族衣装のような服の紐を解くと、ぽっかりと穴が空いた胸に手を添え、静かに顔を上げて目を見開き、眉を潜める。

そのぽっかりと空いた胸の穴の奥では、七色の渦が巻き、静かに明滅していた——

——

『ガアアア——ハアアツ——！』

紫色のエネルギーを纏った剣を両腕で構え、炎を纏って迫り来るバーニングファイヤーに向かって、駆け出すパレート。その剣圧によって、踏みしめたアスファルトが砕け散り、破片が宙に浮いた——

「勝負だ……パレートオオオオツ——」

『バーニングファイヤー！完全に砕け散れエエエ——』

——つづく

プロローグ2 ―超闘神VS終末神―（後書き）

アイン「え？パレート倒したらリベンジャー終わっちゃうじゃん？」

作者「終わらないから安心して」

アイン「バーニングファイヤー強すぎじゃね？戦隊なのにバランス考えてなくね？」

作者「まあ、最終フォームだしね」

アイン「俺……出番全くないんじゃないかね？」

作者「まあプロローグだからね」

アイン「本編を待たねばなんのか……どうなるんだ、これから」

作者「まあ見てて下さいな、少し時間かかってでも完結はするし最終回は多分……泣けるでえ」

アイン「うーむ……胡散臭い」

プロローグ3 ―止まる世界の中心は―

「やっぱりここもだ裂子さん——この島全体が完全に停止してやがる」

その男、北崎忍きたきみ しのぶは中学校の校門の前で足を止め、その景色を見て嘔然としていた。

——動きを止め、彫刻のように固まる中学生達、12時三十あたりで完全に針を止めた時計。

そう、東京都二十四区の島の中の街の全てが停止事態だったのだ——

「パレートの仕業だ——この力を使い、奴は幾つもの星々を——」

北崎の背後に立つ冷泉裂子れいせん さきこは、唇を噛みながら校門沿いの道路で停止している車を見回す。

いつも通りの淡々とした口調で話すが、その表情は心なしに少し強張っていた。

「パレート……これがパレートの力なのか——しかし酷いことをしやがる！」

白いジャケットを着た銀髪の青年、アインはそのほっそりとしていて高い背を裂子に向け、歩道の空き缶を蹴り飛ばす。

元々は戦闘人型バイクであった彼も、今の異常な事態に焦燥感を感じ、眉間にしわを寄せていた――

「全くだ——しかし、断兎はどこへ行っただんだ――」

黒いジャケットを羽織る長身の青年、なんじょう・まこと南条真琴は短い金髪をかきむしりながら、道路で停止している車のボンネットに座った。

「あの怪物——エンドラスと戦ってるのかな」

皆より頭2つぶんぐらい背の低い、オレンジ色のジャージを着た中学生・タケシ少年は戸惑いながらも皆の表情を見回す。

彼は自分と傷つけ合っていたクラスメイトのユウトをパレートの大幹部・灰帝絶竜エンドラスに吸収されたため、自らも戦うことを決意しリベンジャーと行動を共にしているのであった。

「まあ、今のあいひつなら殆どの敵は倒せるだろうけどな」

戦闘経験が無い戦いに関しては全くの素人（状況からしてみれば当然であるが）であるタケシを安心させようと軽口を叩く北崎。

「その事なんですがあ……皆さん——」

タケシ少年の横に立つ、金髪をポニーテールに束ねた女性・かしわぎ・なつめ柏木棗は掌サイズのモバイル端末を閉じ、浮かない表情で皆の顔を見回した。

「ついさっき、断児さんの熾烈携帯から要請があったらしくて……私たちの基地からエレメンタルリベンジブレイカーが転送されたみたいですよ——」

柏木はいつになく真剣な表情で皆に伝え、モバイル端末をその胸で抱きしめる。

その言葉を聞いた、裂子の顔が強張る。

「本当か……柏木博士？」

裂子に向かって、静かに頷く柏木。

「はい……間違いありません」

―数秒の間、無言の重苦しい空気が流れる。

その空気の中口を開いたのは、アインであった―

「エレメンタルリベンジブレイカーってあれだろ……何だったっけか」

知ったかぶりで墓穴を掘るアイン、しかし彼が喋ると重苦しい空気が少しだけ打開され、柏木が語りだした。

「エレメンタルリベンジブレイカーは新しい断兎さん――超闘神バ―ニングファイヤーの無限に近いパワーを増幅するために、超常科学・神秘・獣の力を複合させて作り上げた地球至上最強の究極必殺武器です――」

不安そうな表情のままの柏木はモバイル端末を開き、皆に向かってそのモニターを見せる。そこには、設計図段階のエレメンタルリベンジブレイカーが映し出されていた―

「それを使わなければならないということは、今断兎が戦っている敵は相当のものなのだろう――断兎が危険だ」

南条は瞳を細めて駆け出そうとボンネットから尻をどけて立ち上がる、それを察した裂子は静かに頷き、皆の顔を見回した。

「——もう時間は無いようだ、行くぞみんな」

裂子に言われ、皆が駆け出そうとした——その時であった。

『悪いが——それだけは絶対にさせん!!』

車道の向こうから響く叫び声。

それと同時に、凄まじい破壊光線が裂子達の元へ迫り、その衝撃波が周囲のアスファルトを吹き飛ばした。

「ふんッ!」

間一髪、裂子達は攻撃を避けるために跳躍し破壊光線と衝撃波を避け、校庭へと着地した。

「貴様か——灰帝絶竜エンドラス!」

地面から立ち上がる裂子は、校庭へと迫り来るエンドラスを睨みつける。

全身から灰を巻き上げるエンドラスは、裂子達の目の前に立ちはだかり、そのカブトガニのような頭でリベンジャー達を一瞥する。

『リベンジャー! 今日こそ貴様達を倒す!!』

体の全身から灰を放出し、エンドラスはその灰を三本の長い爪と指をもった右手に収束させて巨大な両刃の剣——絶竜剣を作り上げる。

『我の力の全てを以て——!』

エンドラスはマントを靡かせて握りしめた絶竜剣を振り上げると、

その鋭い先端をリベンジャー達に向けて突き出した―

「望むところだ！みんないくぞ―」

「エクステデター！―」

北崎を先頭に、四人が変身コードを叫ぶ。

すると各人はそれぞれ緑・黒・青・白の色の光に包まれ、一気に変身を完了させた―

「深緑の業師！^{わざし}ホレストグリーン！―」

北崎が変身を遂げたブーメラン状のゴーグル、緑色のマスクと全身をもった戦士、ホレストグリーンは左手を斜め上に、右肘を曲げて見栄を切る。

「無音の狙撃主！^{サイレントイエーガー}シャドウブラック！―」

南条が変身を遂げたシャドウブラックはエンドラスを一瞥すると、腕を組んで見栄を切る。

「白き愛の戦士！ホワイトウィンド」

アインが変身した白いマスクの戦士ホワイトウィンドは左腕を頭上に振り上げ、右手をその肘に添えて見栄を切る。

「蒼き復讐者！！オーシャンブルー」

冷泉裂子の変身したオーシャンブルーは特に見栄を切ることなく、エンドラスを真っ直ぐに睨みつけた―

「果てなき可能性を、未来へ繋ぐ！」

ホワイトウィンドは色を無くした空を指差し、再び腕を前へ構えた。

「熾烈戦隊！リベンジャー！！」

名乗りを上げる四人の戦士達。

するとそれぞれのポーズを決めたままの彼らの背後で、四色の爆発が巻き起こった――

『いいだろうリベンジャー！その可能性――俺が奪い去ってやる！』

灰帝剣を振り上げ、名乗りを上げた四人に向かって一気に駆け出すエンドラス。

凄まじい灰が校庭中に巻き上がり、戦士達を包み込む。

今、熾烈なる戦いの火蓋が切って落とされた――

プロローグ3 ―止まる世界の中心は―（後書き）

作者「ついにリベンジャーも最終回が近づいてきました」

アイン「なんか、過去の戦い（熾烈戦隊リベンジャーの方）が改変されてないか？」

作者「うん、旧熾烈戦隊リベンジャーは武器とか変えたり、ちょこちょこ編集しとる、デウスマキナの登場回を増やしたりとか」

アイン「最終回でしっかり俺はサッカーと結婚できるのだろうか……」

作者「さあ、私次第だね」

アイン「なんとかそこを一つ……」

作者「うーん……私は柏木さん派だしなあ……」

アイン「自分のキャラをエコひいきすんな!!」

第0話 その名は飛蝗王（前書き）

この0話は、プロローグの一週間前の出来事である。

悪魔の野球ボールマシン

児童虐待変身戦士

仮面ライダー

登場！

第0話 その名は飛蝗王

——これは、時間の止まった街でエンドラスとリベンジャーが再び戦う、一週間前の出来事である——

タケシ少年は、パレートの大幹部・灰帝絶竜エンドラスに傷つけあったクラスメートのユウトを吸収されてしまい、戦いを決意した中学生である。

体系はやや贅肉があるが筋肉はほどよくついており、スポーツ刈りの頭と少し神経質な感じのする二重の瞳、全体的に狸顔な事が特徴である。

性格は内向的で、自分からはあまり他人に話しかけないタイプ、流行りなどを知らないためにクラスの中では浮いた存在であった――

そのタケシ少年は熾烈戦隊リベンジャーの頭脳、巨乳（死語）の美女・柏木博士から、縮小することができる能力をもった仮面ライダーへ変身するベルトを授かった。

ベルトの力を使いこなすため、ユウトを救出するために、熾烈戦隊の基地内で特訓を繰り返していた――

「なんか……広いなあ」

タケシ少年は呆れたような声で周囲を見回す。

熾烈戦隊の基地内にある特訓場は半径五百メートルほどの円形のドームであり、細かい砂が敷き詰められている。

因みに、地面の所々にクレーターがあり、彼ら熾烈戦隊の特訓の凄まじさが伺い知ることが出来る――

「あんまりボサっとするなよ少年——これは基本的な練習だけど、疎かにしたら死ぬんだからな」

ドームの中央に立つ少年の横で、緑色のジャージに身を包んだ北崎が真剣な表情で言い放つ。

「はっ！はいッ！」

慌てて頷くタケシ少年、北崎はその返事を聞くと、サングラスをかけて自分達が立つドームの中央から、数メートル先を見つめた。タケシ少年にとって北崎は、熾烈戦隊のメンバーの中で一番自分の面倒をみてくれる人物であり、悩みなどを聞いてくれる頼れる兄貴分といった感じであった。

そんな面倒見のよさは、北崎の性分なのかもしれない。

「よし！まずは——時速100キロのスピードボールに書いてある数字を読んでみるんだ！」

北崎は数十メートル先で既に稼働を始めた野球マシーンを指差し、サングラスをクイツと上げた。

野球マシーンとは、よくゲーセンのバッティングセンターで稼働している、野球ボールを高速で打ち出す機械である。

「はい！！って——ええっ？！」

タケシ少年は勢いよく返事をするが、その返事とほぼ同時に野球ボールが時速100キロの早さで少年の真横を通過した。

「どうだった？」

北崎はサングラスを再びクイツと上げながら首を傾げる。
その表情は少し不安げであったが、瞳だけはタケシ少年を真っ直ぐに見つめていた。

「――24です……た……多分」

自信なさげに、と言うか当てずっぽうで答えるタケシ少年、本当は分からないと答えたかったが、根が真面目な彼はそれだけは言いたくなかった。

北崎はそのタケシ少年の気持ちを察したのか、サングラスを外して困った表情を見せた。

「ううむ……ライダーになるにはこの方法がいいって知り合いが言ってたんだがなあ――」

北崎は何かを考えながら腕を組んで俯く、そして数秒後、何かを閃いたかのように頭を上げた――

「やっぱり実力つけるには、実戦訓練しかないようだな少年！エクステデーター！」

危険だが一番手っ取り早い方法で鍛えることを決意した北崎は変身コードを叫ぶ。

北崎は次の瞬間にはホレストグリーンに変身し終え、両腕を構え、一気にタケシ少年に迫った――

「ひいっ――！――！」

迫り来る緑色の化け物——もとい、ホレストグリーンを見つけて、タケシ少年は瞳を見開いて悲鳴を上げる。

普通の中学生ならば、極々普通の反応である。

しかしタケシ少年は、普通の中学生では無かった。

メーザス戦・エンドラス戦……何度でも立ち上がるリベンジャーの戦いを多く見つめてきた彼は、この程度のことでは負けない気持ち、不屈の意志が芽生え始めていた——

「くっ——ま……負けるかあッ!!」

今まで軋轢があり何度も傷つけ合った少年を助けたい、その気持ちがタケシ少年の喉から叫びを生み出す。

「変身ッ!!」

タケシ少年は、腹に巻かれた中央にクリスタルが埋め込まれ、その下に四つのボタンが横一列に埋め込まれた機械がある銀色のベルトの一番右のボタンを押す。

するとタケシ少年は、クリスタルの銀色の光に包まれ、一気に変身を開始した——

数秒後——

「ぐがあああっ?!」

ホレストグリーンの電光石火の一撃を受け、変身が解除されて吹っ飛ぶタケシ少年。

ホレストグリーンは仰向けに倒れたタケシ少年を見下ろして、自

らの頭を掻いた。

「うーん……なんかこれ、普通に児童虐待な気がするなあ……」

ホレストグリーンは自分の拳を見つめて戸惑う。

しかしその前で、埃と切り傷だらけのタケシ少年は砂塵を巻き上げて立ち上がった。

「だ！だ……大丈夫です北崎さん！俺は……俺はやります！！」

タケシ少年はホレストグリーンを真っ直ぐに見つめ、再びベルトを使い変身始める――

「全く―――どうして俺の周りはこちらも熱い奴ばかりかね！！」

ホレストグリーンは嬉しそうに叫ぶと一回だけ首を回して整理運動を行い、一気にタケシ少年に向かって駆け出した――

―数時間後、熾烈戦隊基地内の食堂にて―

「アイン！それは俺のカツフライだ！」

「へへっ！早いもん勝ちだろ南条ッ！」

時計の針が七時を指しているその頃、熾烈戦隊の食堂内は南条やアイン、そして基地で働いている多くの隊員達が食事をしていた。

「あ……すみませんおばさん、今日のメニューは？」

一日の大半を北崎と特訓していたタケシ少年は疲れ果てた様子で、食堂のカウンターに顔を出した。

「ああ！ちよっと待ってなボウズ！」

料理長のおばさんである愛はその太めの体を動かし、食堂の奥へと下がっていく。

「はいよ！」

愛がカウンターに出した食事は、山盛りのキャベツに焼き肉、薄切りレモン、そしてひじきの入った卵かけご飯であった。

かなりの量が盛られたその晩御飯を前にして、タケシ少年は圧倒された。

「俺、こんなに……」

タケシ少年は量を減らしてもらおうと、厨房の中へ戻っていく愛へ呼びかけようとした。

「あ……」

しかし、それよりも早く腹の虫が鳴り、体中が空腹感で満たされていく。

「今なら何となく食べられそうだろう少年！愛さんの作った【熾烈丼】！」

既にテーブルで食事をしていた北崎はタケシ少年に向かって叫び、再び食事を頬張っている。

タケシ少年はそんなにも元気で活発な北崎を見つめると、小さく腰を落としてガッツポーズをとって意気込んだ。

「よし——明日も頑張らないと!!」

タケシ少年は熾烈井を乗せたトレーを持つと、北崎の座るテーブルの向かいへと駆けて行った——

熾烈戦隊の特訓とは、文字通りに熾烈である。

食事もしっかりと摂取しなければ、その幾多の死線をくぐり抜けることは出来ない。

しかし、死線や様々な壁を越えた時、人は初めて何かを掴み取ることが出来るのかもしれない。

タケシ少年と北崎の戦いは、エンドラスと再会する一週間後まで毎日続いていた——

第0話 その名は飛蝗王（後書き）

裂子「北崎……なんかお前……私より鬼コーチっぽいぞ」

北崎「まあ、俺もああして裂子っちに鍛えられたし、いいじゃないか」

南条「多分兄者は面倒見がいいんだ、俺は悪いが——自分のことで精一杯だ」

作者「そういえば、某戦隊ではお掃除やお買い物とかで修行してたけど、タケシ少年はそういう修行をどう思う？」

タケシ「え……なにそれ？ そんなんで強くなれんの？」

作者「なれちゃうんだよね……裂子さんはどう思う？」

裂子「……ノーコメントだ」

作者「北崎はどう思う？」

北崎「（そんな修行）甘い！どんなゆとりやねんと！！やるならトコトンやれよッ！！」

作者「うーむ……しっかしそうだよねえ……南条はどう思う？」

南条「俺もノーコメントで……修行もそれぞれあるのだろう………多分」

北崎「よしッ！いくぞ少年ッ！夕日に向かって走れッ」

タケシ少年「はいッ！！」

作者「まあ……これが、熾烈戦隊の鍛え方なのよね」

裂子「そうだ、これで私達は勝利してきた……そしてこれからも負けない！」

作者「皆さん！そんな熾烈戦隊をよろしくお願いします！祝1周年です！」

アイン「長い間書かなかったただけだろ（ボソッ）」

作者「うっせ！！」

アイン「あべしッ!」

第一話 果てしなき戦いへの序曲（前書き）

【注・プロローグからの続きです】

灰帝絶竜エンドラス

パレート

登場！

第一話 果てしなき戦いへの序曲

停止した時間の中で、戦士達の戦いは続いていた――

二十四区の中学校の広い校庭の中央で対峙する、ファイヤーレッズを除く熾烈戦隊の4人の戦士達とエンドラス――

『来いッ！――ドラス兵っ！！』

エンドラスは右腕を振り上げると、その周囲の地面から無数の灰が巻き上がる。

その灰はエンドラスと同じくカブトガニのような殻を被った戦闘員――ドラス兵へと姿を変え、真っ直ぐな刀身をもつ両刃の剣を構えた。

『ギギッ！コロスッ！コロスッ！』

無数のドラス兵は不気味に呻きながら、リベンジャー達に向かって駆け出す――

「やらせっか！Vヤイバーッ！」

ホワイトウィンドは先陣を切ってドラス兵達の群れに向かって走り、野太刀のように長い刀身をもつ刀・Vヤイバーを右斜めに構えた。

Vヤイバーの刀身は白いエネルギーが発生し眩い光を放つ――

「Vスラッシュユー！！」

ホワイトウィンドがVの字にVヤイバーを振り下ろすと、その刀身はVの字のエネルギーの刃を描く。

描かれたVの字のエネルギーの刃は輝きを増しながら、迫るドラ

ス兵達に向かって加速する――

『グウツ！ギャアアッ！』

並みいるドラス兵達は、構えた剣ごとエネルギーの刃によって切り裂かれ、再び灰に戻り、爆発していく――

周囲で爆発していくドラス兵達を見渡し、ホワイトウィンドは再びVヤイバーを構える。

「けっ！お決まりパターンが俺達に通用するかよ！！サツキー！」

全方位から迫る数十体のドラス兵達に向かって再び刃を振るうホワイトウィンドは、自らが最も愛する女の名前を叫ぶ。

するとその呼びかけに応えるかのように、ホワイトウィンドの背後を剣を構えた青い戦士が駆け抜けていく――

「灰帝絶竜エンドラス！！吸収した少年を――返してもらおうぞ！！」

裂子が変身した青い超人・オーシャンブルーは刀身が蛇腹になっている剣・イビルディバイザーを横に構え、巨大な灰帝剣を構えたエンドラスへと迫る。

「でえええええいッ！」

オーシャンブルーは横一線にイビルディバイザーを振る。

蛇腹の刃はまるで蛇のようになると、一気にエンドラスの剣の間合いに到達した――

『来るか!! 女ごときがああッ!!』

叫ぶエンドラスは両腕に力を込め、灰帝剣を大地に振り下ろす。先端が大地にめり込んだその巨大な刃から凄まじい衝撃波が発生し、間合いに到達していたイビルバイザーの刃を粉碎する。

『どうした?! ——そこまでなのか?!』

砕け散る刃をよそに、エンドラスはオーシャンブルーの間合いの一手手間まで到達し、振り下ろした巨大な灰帝剣を軽々と横に構え直す。

『熾烈戦隊の力とはああああッ!!』

構え直した灰帝剣は、一瞬にも満たない時間でオーシャンブルーに向かって走る。

「熾烈戦隊の力を——」

オーシャンブルーは右腕で瞬時に腰のグリップ・Wセレクターを引き抜くと、その先端には鉋のような直接的な刀身をもった刃・Dブレードが出現し、一気にそれを振り上げた。

「見誤るなあああ!!」

叫ぶオーシャンブルーによって振り上げられたDブレードは刀身がボロボロになりながらも、灰帝剣を受け止める。

『なにっ?!』

停止した時間の中の乾いた大気の中に鏗迫り合いをする灰帝剣とDブレードの音が響き渡り、凄まじい火花が散る。

オーシャンブルーはエンドラスとほぼ零距离の状態まで密接し、両足を開いて大地を踏みしめる。

するとその胸の装甲が中央から左右に開放され、無数の光の粒子

が収束した――

「エンドレス――デスヘブンッ!!」

開放されたオーシャンブルーの胸から一条の青い破壊光線が放射される。

オーシャンブルーの特殊能力である「破壊光線」は密着したエンドラスに直撃し、その巨体と灰帝剣を濁流のように体を飲み込んだ――

『なにっ?!』

怒濤の破壊光線はその名の通り無尽蔵に放射され、エンドラスの姿は完全に光の中へ包まれた――

『見誤るな、か――そうだったなりベンジャ―!!』

青い光の中から執念すら感じさせる竜の声が響き、オーシャンブルーに向かって灰帝剣が再び振り下ろされる――

「くっ!!」オーシャンブルーは破壊光線を放射する手を休めることなく、両手で両腰から再びWセクターを取り出し、その先端に転送されたブーメランソードによって灰帝剣を受け止めた。

一瞬などという言葉で表すことが出来ないほどの、刹那の攻防。

『貴様達はパレットを追い詰める最も危険な存在!! そうだ――手加減などする余裕は無い!!』

光の中からエンドラスが顔を出し、オーシャンブルーの顔を睨みつける。

全身で破壊光線を受け止め続けるエンドラスはその鋭い歯を食いしばり、灰帝剣を握りしめる手に更なる力を加えた――

『この灰帝絶竜エンドラスの名にかけて——貴様達を粉碎する！』

敵への怒りと執念と、パレートに対する忠義——

そして何より、広い宇宙の中で最強とも呼ばれていた己に対するプライドが、闘志となってその竜の全身を包み込んだ——

——

なだれ込むかのように迫る無数のドラス兵達を、ホレストグリーンはブーメランソードで切り裂きながら、背後で立ち尽くすタケシ少年に呼びかける。

「くっ数が多い！——そっち行ったぞ少年！！」

エンドラスとオーシャンブルーの壮絶な戦いを見つめていたタケシ少年はその呼びかけを聞きハッと我に返ると、その緑色の背中に視線を移した——

「はっ——はい！！」

タケシ少年は慌てて中学校のジャージのジッパーを一気に下ろす。すると黒いTシャツが露わになり、その下の腹部分には中央にリモコンのような四つのボタンが埋め込まれた機械のある銀色のベルトが巻かれている。

「待ってろよユウト——」

タケシ少年は右手を左斜めに構え、左腕をその肘に添え、大きく息を呑んだ。

瞳を一瞬だけ瞑ると、北崎との一週間が脳裏浮かぶが、次の瞬間、彼は大きく瞳を見開いた——

「変身!!」

タケシ少年は幾つもの絆創膏が巻かれた指で、緑色に明滅するクリスタルが埋め込まれたベルトの中央のボタンを押す。

するとベルトに埋め込まれたクリスタルは光り輝き、タケシ少年の全身を包み込んだ――

「システム・オールグリーン」

ベルトから無機質な機械音が響くと少年を包み込んでいた光は消失し、そこにはただの中学生ではなく、一人の戦士が立っていた――
「……」

立ち尽くすその戦士は黒いグローブに包まれた拳を握りしめ、少しだけ俯いた。

その戦士こそタケシ少年が変身を遂げた姿――額に銀色の王冠のようなアンテナ、緑色に輝く楕円形の瞳に飛蝗のような赤いマスク、そしてオレンジ色の装甲に包まれた黒い全身をもつ仮面ライダーであつた。

「仮面ライダー……キングホッパー!」

仮面ライダー・キングホッパーは首に巻かれた緑色のマフラーを風に靡かせ、右腕の肘を曲げて右肩に左手を添え、迫り来る無数のドラス兵達に向かって颯爽と見栄を切った――

第一話 果てしなき戦いへの序曲（後書き）

この作品のご意見ご感想をお待ちしております、拙い文章ですけど宜しく願います。

アイン「つうか今回のサブタイ見てるとあと何十話も続きそうな勢いだなおい」

作者「いや、あと四話くらいだと思う」

アイン「え……でも果てしなきて……」

作者「つまりそれくらい壮絶な戦いなんだってヴァ」

アイン「うーむ……まずはエンドラス倒さんと!! つうかラスボスのハズのプレートもバーニングファイヤーに倒されそうじゃねえか!!」

作者「でもそんなの関係ねえ! でもそんなの関係ねえ!」

アイン「安易に芸人のネタ使うな!!」

作者「はいっ! とういまってえーん!」

アイン「だから古いて! すぐそうなるからやめろっつの!!」

作者「はいはい、それよかここまで読んでくださった読者の皆様、

これからの季節寒くなるんでカゼに気をつけて下さい」

アイン「……そういう呼びかけて普通作者じゃなくてキャラクタ
ーにさせない？」

作者「それだ!!」

作者が何かを閃きつつ、次回へ続く

第一話 第二部 ―旋風―

「システム・オールグリーン」

タケシ少年が変身を遂げた姿――それは額に銀色の王冠のようなアンテナをもち、緑色の楕円形の瞳に飛蝗のような赤いマスク、そしてオレンジ色の装甲に包まれた黒い全身をもった戦士――仮面ライダーであつた。

「仮面ライダー・キングホッパー！」

タケシ少年が変身した仮面ライダー・キングホッパーは首に巻かれた緑色のマフラーを風に靡かせ、迫り来るドラス兵の群れに向かって駆け出した――

『グッ?! 仮面ライダーだと?!』

ドラス兵の群れは、その戦士の姿を見つめて一瞬だけおののく。地球を代表するヒーローの一つである仮面ライダーの力は、彼らも知っているから。

『慌てるな?! ただのこけおどしよッ!』

ドラス兵は両刃の剣を振り上げて、一気にその刃をキングホッパーへと振り下ろす――

「当たるかッ! マイクロライダーパワーッ!」

しかし、ドラス兵の剣がキングホッパーのすぐ手間に迫ったその時、

キングホッパーはベルトの右ボタンを押した―

するとベルトから放射されたエネ一氣にその体をピンポン玉サイズに縮小させドラス兵の剣を避けた。

『なぬっ―?!』

縮小したキングホッパーは大地に着地すると頭上を見上げ、ドラス兵へと跳躍した―

「キングホッパーキック!!」

ピンポン玉サイズのキングホッパーはドラス兵へ跳び蹴りを繰り返す。

その小さい体にそぐわぬパワーと加速力を見せるキングホッパーは一筋の閃光となり、一氣ドラス兵の頭を貫通した―

『グヴォオッ?!』

頭が貫通されたドラス兵は後ろ向きに倒れる。

その瞬間、息絶えたドラス兵は灰になり、一氣に大爆発を起こした―

爆煙を背に、キングホッパーは再び見栄を切り、周囲のドラス兵を見回す。

「俺はもう負けない! ユウトを自分の手で助けて― ユウトと話をつけなきゃいけないんだ!」

その光景を見て少しだけたじろいだドラス兵を見回して、普通の人間のサイズへと戻ったキングホッパーは両腕を構えた―

ホレストグリーンは背後を振り返り、あまりに小さい姿に変身するキングホッパーに蹂躪され、倒れていくドラス兵達を見つめた。

「やるなタケシ! 流石俺の特訓を受けただけはあるぜ!!」

ホレストグリーンはL字型の刃をもつブーメランソードを投げつけ、エンドラスの周りを囲むドラス兵の群れをなぎ払う――

『グッ――強い！――あの緑の奴は強過ぎる！！』

鬼神の如く敵を切り裂くホレストグリーンと、あまりに小さな橙色の戦士を前にしたドラス兵達はたじろぎ、後退りする。

『クカカカカッ！聞き捨てならねえなあッ！！』

そんなドラス兵達の頭上を、白銀の全身の戦士が奇声をあげながら飛び越える。

次の瞬間、頭上を見上げたドラス兵達は前方より飛来したブーメランソードによって横一列に切り裂かれ、一気に爆発した――

「てめえは――何もんだ？！」

ホレストグリーンはブーメランソードを握りしめたまま校庭を埋め尽くさんばかりの灰を蹴り上げ、その白銀の戦士を真っ直ぐに睨み返す。

――見覚えが無いわけでは無い、目の前にいる錆びついた白銀の装甲に身を包み、ナイフのような隻眼に、カメラのようなものを移植したかのようなマスク、胸に【害憎徒】と刻印が刻まれた戦士は確実に以前戦っている。

ただ、影の薄いこの狂戦士を覚えていられるほど、北崎の戦いは暇ではなかった――

『くっ！このガイゾート様を忘れやがるとは――最初に言っておくが、俺は以前よりもさ――に、強いぞ！！』

白銀の戦士・ガイゾートは激昂した、そう、彼はオーシャンブルーを人質にリベンジャ―を抹殺しようとしたパレートの雇われ幹部、ガイゾートであった――

ガイゾートはどこかで聞いたような聞かなかったようなフレーズを叫び、レーザーブレードの先端をホレストグリーンに突きつける。

そしてレーザーブレードを右手で逆手に握りしめて腰を落とすと、一気に彼の間合いへと駆け抜けた――

『死ね!! 今すぐ死にやがれええいつ!!』

閃光のような突きが、ホレストグリーンを襲う――

しかし、ホレストグリーンの前蹴りがレーザーブレードよりも早くガイゾートの顔面に炸裂し、一気にマスクに大きな亀裂が入る。

『うぐあッ?!』

情けないうめき声をあげて、ガイゾートは少し後ろに仰け反る。

「死ね死ねるっせえ!! 俺達はクライマックス直前なんだよ!! 空気を――読みやがれ!!」

ホレストグリーンはブーメランソードを腰のホルダーに戻しながら、両脚で連続の蹴りを繰り返す。

ガイゾートその蹴りが体に直撃し、大きく吹き飛んだ。

『ぐううッ?! 馬鹿な... 何故俺様がッ?!』

地面を転がったガイゾートはよろよろとふらつきながらも立ち上がり、力無くレーザーブレードを構える。

「必殺武器――三獣連刃ワイルドラッシャー!!」

叫ぶホレストグリーンの右の前腕は緑色に光り、竜の背ビレのような三つの銀色の刃が付いた装甲が追加される。

それは三獣連刃さんじゅうれんばワイルドラッシャー。

【仮面ライダーアマゾン】を始めとする【爆竜戦隊アバレンジャー】などの獣の力を借りて戦う戦士たちの武器である腕の刃を模した、必殺武器である――

「はああああッ！！」

必殺の武器を携えたホレストグリーンは大地を蹴って緑の旋風となり、ガイゾートへ向かって一気に駆け抜けた――

『死ねええええいッ！！』

ガイゾートの横一閃のレーザーブレードが繰り出され、赤い刀身がホレストグリーンの体を襲う。しかし――

「ホレストグリーン――超必殺！！」

しかし、ホレストグリーンは一気に飛び上がってレーザーブレードの一撃を避けると、空中で一回転し、ガイゾートの背後に着地した――

『ぐうッ――?!』

一瞬にして振り返り、右腕のワイルドラッシャーを振り上げ、ガイゾートを引き裂くホレストグリーン。

静止した世界の校庭の大地で、上半身と下半身が斜めに切断されたガイゾートが短い断末魔をあげ、静かに地面に伏した――

「りよくがそう緑我爪 だいせつざん大切斬!!!」

ホレストグリーンの唸りと共に、ガイゾートは緑色の光を放ちながら一気に爆発する。

ホレストグリーンは新たな必殺武器を掲げ、黒煙を背に静かに周囲を見回した――

『馬鹿な?! 強すぎる!!』

『こんな奴――勝てっこねえ!!』

周囲には彼の戦いを見ていた無数のドラス兵達がたじろいでおり、その剣を持つ腕は小刻みに震えていた。

「いくぞ少年!――クライマックスだ!!」

ホレストグリーンは叫ぶと、彼の肩に小さなピンポン玉サイズのキングホッパーが飛び乗った。

「はい!!」

決意を胸に大きく頷くキングホッパーを肩に乗せたまま、ホレストグリーンは駆け出す。

三つの爪をもった緑色の旋風は再び校庭の中を縦横無尽に駆け抜け、再び無数のドラス兵達を駆逐していく――

第一話 第二部 ―旋風―（後書き）

作者「感想頂いた！ありがとうございます！」

アイン「久しぶりだな……なんか」

作者「これからもリベンジャ―の戦いは続いています！益々苛烈に熾烈になる話を最後まで宜しく願います！」

アイン「とうか……熾烈戦隊リベンジャ―……無印を含めるともう一年以上やっているのな」

作者「あ………そういえばそうだね」

アイン「（気づいてなかったんかい……）」

作者「しっかしここまで続くとは思わなかった、最初は12話くらいかと思ってた、いろいろ作ってぐ中でアイデアやシナリオが浮かんでくるから色々詰め込み気味だけど」

アイン「そうなのか？」

作者「だって柏木登場とかアインが超人化とか完全に思いつきでやったし、なんかバイクの使い道が思いつかなかったから」

アイン「あのまま退場させようとしてたんかい……まあ、いいや」

作者「来週（次回）もお楽しみにね！！次回のあとがきには柏木さんが出てくるよ！！！」

アイン「俺は？」

作者「萌え成分足りないから来週は休もう？」

アイン「差別や！作者が差別しとる！！！」

作者「ではまたねー！風邪に気をつけてねー！」

第一話 第三部 ―灰帝―

時間が静止した街中、交差点の真ん中で対峙する、螺旋を描く烈火の闘志を纏った赤き超人と、悪意の力を纏った黒き怪人。

駆け出したバーニングファイヤーの体中から跳ね上がる巨大な炎は彼のもつ巨大な剣・エレメンタルリベンジブレイカーへと収束し、黒いマントが黄金色の風に靡く――

「重合身剣――エレメンタルリベンジブレイカー!!」

握りしめたエレメンタルリベンジブレイカーは七色の光を放って振動し、甲高い音を響かせる。

バーニングファイヤーは自らが発するエネルギーによって熔解するアスファルトの大地を蹴って一気に加速し、光を遥かに超越した速さでパレートへと走った――

『ギガエンド!! デスツバニツイーツシュ!!』

迎え撃つパレートの握りしめた細長い剣・終末剣ギガバニツシュカリバーは頭上に振り上げられ、放射線状に紫色の闇を放つ。

そして黒い稲妻がほとばしるパレートは迫り来るバーニングファイヤーへ向かって、振り上げられた剣を一気に振り下ろした――

「アルティメットリベンジスラァーツシュ!!」

全身に燃え盛る烈火を纏ったバーニングファイヤーの握りしめる両刃の刀身は凄まじい轟音と共に虹色の光となる。

バーニングファイヤーの叫びと共に、横一閃に渾身の一撃がパレートを襲う――

「うゝええええええいッ!!」

バーニングファイヤーの唸りに呼応するかのよう、パレートも憎しみに満ちた言葉で叫ぶ――

『砕け散れええ! バーニングファイヤーアアッ!!』

守る者と破壊する者――二つの刃に宿った二つの相対的な存在の力が、全力でぶつかり合う。

二人の周囲の空間は大きく振動をしながら歪み、踏みしめたアスファルトは宙を舞って砕け散り、地面は炎と稲妻を放ちながらクレターを形成していく――

「俺は負けない! 仲間の所へ――帰るんだ!!」

そして眩い虹色の閃光と黒き稲妻を帯びた闇は周囲に凄まじいエネルギーを放ちながら相剋し、一気に爆発する。

その爆発により発生した凄まじい虹色の閃光と紫色の闇は、バーニングファイヤーとパレートを包み込んで周囲の街に広がっていった――

――

「来い! 必殺武器!」シャドウブラックの呼びかけに応えるかのよう、周囲の大気中からその手に黒い光が収束し、長い巨大な重火器を形作っていく――

その光は今までとは違うタイプの四角柱に近い形状をした巨大な形状に、ギリシャ文字の【Φ】に似たトリガーが中心に備えられた重火器に姿を変えた。

—それは柏木博士が【仮面ライダーファイズ…ブラスターフォーム】の最強武器・ファイズブラスターを元に開発し必殺武器、ギガシャドウブラスターへと姿を変えた。

「重量子砲——ギガシャドウブラスター！！」

シャドウブラスターはギガシャドウブラスターを両腕で構え、オーシャンブルーと鏢迫り合いをするエンドラスの背中に標準を合わせ、躊躇わずに引き金を引く。

するとその先端からは黒い輝きを放つ一筋の光弾が発射され、一気にエンドラスへと加速する——

『ぐっ！？がああああ！！』

鏢迫り合いを交わしているエンドラスは身動きがとれずに、黒い輝きを放つ烈火の一撃が背中に直撃する。

オーシャンブルーは初めてよめいたエンドラスの剣を弾くと同時に胸からの破壊光線を停止させ、自分の背後に跳躍した——

「くらえ！必殺武器！」

着地したオーシャンブルーは二本のイビルディバイザーを地面に突き刺すと、その両腕に青く明滅する光が収束する。その明滅する光は、先端が金色のドリルになっている円柱状の重火器、スパイラルデトネイターとなった。

するとスパイラルデトネイターの芯の部分は中央からプロペラのように回転し、先端のドリルが本体内に内蔵され、変わりに内部からミキサーの形状をした銃口が突出した。

「スパイラル・ウォールシュートッ！！」

四方に解放されて回転し、青く輝くコンクリートのような液体・プラズマウォールが放射される。

プラズマウォールは身動きがとれないエンドラスの下半身に直撃し、アスファルトのような形状に変質して硬化すると共に電撃を放った――

『ぐぐう?!何をッ――?!』

エンドラスは完全に身動きがとれないが、下半身に力を入れ、自前の馬鹿力で硬化した液体をはねのけようとする、が――

「タケシッ!いつけえええいッ!!!」

エンドラスの正面に回り込んだホレストグリーンはピンポン玉サイズのキングホッパー掴み、一気に投げつけた――

「うああああああつ!!!」

『なああッ?!』

大きく開かれたエンドラスの口の中に、決意の叫びをあげるキングホッパーが飛び込む。と同時にエンドラスの下半身を封じていたプラズマウォールが一気に碎け散る。

エンドラスは力むあまりに、その小さなピンポン玉サイズのキングホッパーを飲み込んでしまった――

「へへっ……成功だな!裂子たん!」

ホレストグリーンはワイルドクラッシャー構えて、緊張した声で軽

口を叩く。

イビルディバイザーを構えながら頷くオーシャンブルーは、我が目を疑った。

「ああ！——っつ？！」

オーシャンブルーの眼前に立つエンドラスのおぞましいほどの紫色のエネルギーを見つめ、言葉を失う。

エンドラスは周囲の大気中から体内に収束させて、その外観を大きく変質させた——

『ふははははッ！！一杯食わされたということか——この私がア！！ならばあッ！！』

エンドラスの体に収束したエネルギーが巨大な腕の下の脇に流れ、同じ形状をした第三、第四の腕を作り出す。

そのおぞましい姿に、ホワイトウィンド。

『あの赤い超闘神との闘いにとっておきたかったが——見せてやる！この灰帝絶竜の真の姿を！！』

エンドラスの瞳は赤く輝き、そのカブトガニのような頭にまがまがしい角が生え、鋭い牙の生えた口元の横の頬の部分から更に鋭い牙が突出し、首全体が伸びて頭が全面に押し出される。

そして背中の甲殻を突き破り、鋭い瞳が開眼している赤く輝く黒い巨大な翼が姿を現し、灰を放出しながらはためいた——

『終末灰帝絶竜——ギガエンドラス！！』

更に凶暴な姿へと変質を遂げたギガエンドラスは周囲の空間が歪む

ほどのエネルギーを放ち、校庭を埋め尽くさんばかりの灰の中心の地面を大きく歪ませる。

『絶竜・大終末灰地獄!!』

ギガエンドラスが唸り声を上げると、歪んだ灰の大地は津波となつて校庭の中を駆け巡り、ドラス兵達ごとリベンジャー達を飲み込む――

「うわあああッ!!」

灰の津波に飲み込まれたオーシャンブルー、シャドウブラック、ホワイトウィンドは、地面に形成された砂地獄ならぬ灰の地獄の穴に一瞬にして、叫びを上げながらその中の空間を落下していく――
ホレストグリーンは灰の津波を避けて飛び上がり、ギガエンドラスへ向かって加速する――

「クソッ!!こんなところで――負けられねえんだよ!!」

逆境にも耐えて必死に叫ぶホレストグリーンを、ギガエンドラスは嘲笑う――

『無駄だ!!今の私に勝てるのはパレートか――あの赤い超戦士だけだ!!諦めて消えるがいい!!』

言い放つエンドラスの首はまるで蛇の体のように伸びて空中を加速し、その牙でホレストグリーンの体を襲う――

「ぐがあああうッ?!」

避けようとするホレストグリーンは右足を、根本からギガエンドラスの牙がすれ違いざまに捕らえ、引きちぎる。

守りたい、やらせない——そんな思いも虚しく、跳躍した際の勢いを失い落下していくホレストグリーン。

『死ぬがいい！ギガエンドビーム！』

ギガエンドラスの翼に開いた瞳から放たれる、針のように細かい無数の紫色のビーム。

そのビームが体に刺さったホレストグリーンは無数の血を噴出し変身が解除される。

片足を失い体中からの出血が止まらない北崎は朦朧とした意識のまま灰が蠢く地面に落下し、一瞬にして灰地獄の穴の中へと飲み込まれていった——

「ぐっ……たっ……タケシっ!!」

消えていく意識の中で、ホレストグリーンはギガエンドラスを睨みつけ、その中にいる、今もつとも守りたい者の名前を叫ぶ——

第一話 第三部 ―灰帝―（後書き）

その頃、我らの柏木さんは。

「……………」

道路の反対側に吹き飛ばされ、気絶していた。

【次回予告】

再会を果たした少年は、自らの気持ちをぶつける。

もう不毛な戦いは意味が無いのだ、と。

少年達の戦いは、終わったのだ。

そしてリベンジャー達は真の姿を現したギガエンドラスの超パワーを前に絶対絶命の危機に陥る。

その時、漢の意地が、意志の力が、新たな牙と爪となり、炸裂する――

「てめえにぶつけてやる！ありったけ以上の――俺の力を！！」

【第二話 覚醒！緑の超闘神！】

今こそ覚醒せよ！第二の究極戦闘体！

第二話 覚醒！決意の緑獣王！！（前書き）

パレート

終末灰帝絶竜ギガエンドラス

？

？

？

？

？

登場！！

第二話 覚醒！決意の緑獣王！！

北崎の意識は、四方が紫色の雲が漂いモヤがかかった暗闇の世界にあった。

幽体離脱のような感じであろうか——体の感覚は殆どないが、そこに北崎は浮かんでいる、意識だけは不思議とはっきりとしていた感覚だった。

「つ——ここは？！俺は——死んだのか？！」

北崎は周囲を見回すが、そこには誰もいなかった。ひたすら無音の空間が上下左右に無限に広がっている――

超人の改造手術の際も、同じような感覚であったことを、北崎は思い出していた――

「半分当たりですね、今のあなたは精神体——体と心が分離している状態です」

北崎の目の前に、貝のような鎧を全身に纏ったショートヘアの一人の少女が浮かび上がり、実体となって現れる。

それは、半年近く前に北崎が出会った少女、水棲人類・水辺由亜みずべ ゆあであつた――

「うわっ———つうかなんでここにいる？」

北崎は驚きを隠せずに目を見開く、しかし由亜に再会の喜びなどを感じている様子はなく、淡々とした口調で話しを始める。

その瞳は決意を決めて闘う者の、真っ直ぐな瞳であつた――

「テレパシス——水棲生命体である私達的能力です——」

由亜は少し眉をひそめて、北崎に近づいた。

「私は、あれだけ壮大な決意を口にした人が倒れたら、絶対絶命になったらどうなるか——見に来たんです」

以前とは違い、自分を試しているような少しひねくれた言葉に北崎は戸惑う。

こいつ、性格の悪い女だったか？と頭を押さえた——

多分、あの後性格がひねくれるほど戦ったのだろう、と北崎は思うことにした。

実際、今の彼女の瞳は超人となり戦いを始めた頃の北崎と似ており、着ている鎧はボロボロで、体中に幾つもの小さな傷が見受けられた。

「お前も——戦ってたんだな……」

北崎が問いかけると、由亜は静かに、だが大きく頷いた。

「戦っています——自分の同胞を守るために」

由亜は腰の鞘の中に収められた剣の束を握りしめて、北崎を見つめる——今まで以上に真っ直ぐな瞳であった。

「——あなたはどうするんですか？」

北崎は口元は少し緩んだ、言われるまでも無い、もう答えは一つしかない。

断児やタケシ少年と共に歩み、二人の戦いを見つめてきた自分が、今更引き下がって一人だけ勝手に死んでしまうわけにはいかない。立たねばならんのだ、今、自分が――

「断児もお前もタケシも――俺の後に続くものが命をかけて戦っている――だったら分かりきったことだろ――戦う、全力以上でな！――」

北崎は右腕の手のひらを握りしめて宣言する。

もうすっかり感覚は戻っていた、後は目を覚ますだけである――

「変わらないんですね――あなたは、どんな状況でも」

北崎は大きく頷くと、真面目な表情で由亜を指差して笑った。

「お前も変わるな、お前の優しさだけは変わらずに――強くなれ！――」

北崎は由亜を指差して、笑いながらホレストグリーンへと変身を遂げた。

その体からは黄金色に輝く光の粒が無数に放射され、紫色の雲が広がるこの空間を明るく染め上げていく――

「結構無茶を言うんですね――あなたは」

背を向ける北崎に対して、関心したような声を出して由亜は始めて笑った。以前のあどけなさは無かったが、その笑顔を背したホレストグリーンは、その金色に輝くその空間の中を飛翔した――

「無茶じゃないことを証明してやるよ——この俺が!!」

『ふはははッ！結局……私の完全勝利のようだな！リベンジャー
!!』

灰が渦巻く校庭の中で、巨大な翼をはためかせたギガエンドラスは
両腕を振り上げて叫ぶ。

ギガエンドラスはリベンジャー達を飲み込んだ無限に続く灰地獄
の穴を見下ろして勝利を確信すると、一気に飛翔しようとする、が

『ん——?!なんだっ?!これは——』

飛び立とうとした瞬間、地響きが大地を襲う。

そして灰の穴の中から、大きな獣の叫びが校庭に一気に響いた——

「ヴォアオオオオオオウッ!!」

木々と草が絡まって創造された緑色の巨大な竜が、天空に響くほど
の叫びを上げて灰の穴から這い出てくる。

その巨大な竜はトカゲに近い形状をした10メートルほどの全長
を大地に露わにすると、ギガエンドラスよりも更に巨大な翼をはた
めかせ、全身から黄金色の風を放射した——

「うわあああああ」

巨大な竜が突き抜けた校庭は灰が全て吹き飛ばされ、オーシャン
ブルーを始めとするリベンジャーの戦士達も地面から吹き飛び、校

庭に投げ出された、たった一人——ホレストグリーンを除いて。

「くっ！助かったのか？」

校庭に投げ出されたシャドウブラックはよろめきながらも立ち上がり、周囲を見回す。

「そうらしいな——つか、なんだア？！こいつはッ！！」

ホワイトウィンドはシャドウブラックに向かって頷くが、彼の背後にいる巨大な竜を見上げて驚きの声を上げる。

彼の横で立ち上がったオーシャンブルーそして緑色の竜から放たれる金色の風に吹かれ、その圧倒的な存在感に目を奪われた。

「敵——ではないようだな……だが、凄まじいパワーだ」

リベンジャー達が見上げる緑色の巨大な竜は、幾つもの草が絡まって創造された瞳でギガエンドラスを一瞥する——

『ぐっ！！ただの——ただデカいだけだ！！私には及ばん』

焦りを隠すかのように叫ぶギガエンドラスは口を大きく開放させて白い破壊光線を放射すると同時に、翼についた瞳から巨大な紫色のビームを一斉に放射した——

「ヴオオオウッ！！」

ビームと破壊光線が直撃する瞬間、緑色の竜は周囲に銀色の光を放射し、そのエネルギーを吸収する。

ギガエンドラスの攻撃をものともしない緑色の竜はギガエンドラスを威嚇するかのよう立ち上がり、その鋭い牙の生えた口をゆっくりと開いた——

「見せてやる——北崎忍の究極の進化を!」

巨大な竜の口の中から現れた仁王立ち状態の北崎忍は決意の瞳を細め、いつもよりも重い口調で叫ぶ。

どういうわけか食い千切られた右足も完全に再生しており、全身から黄金色に近い小さな光を放っていた。

そして緑色の光に包まれホレストグリーンへと変身すると、全身から金色と緑色が混ざったような粒子のエネルギーを放射し、ワイルドクラッシャーが装備された右腕を振り上げた——

「ワイルド——アップ!」

——つづく——

第二話 覚醒！決意の緑獣王！！（後書き）

この作品のご意見ご感想をお待ちしております。

第二話 第二部 ―再会―

タケシ少年が変身を遂げたキングホッパーはギガエンドラスの体内へと侵入し、無限に続くかのような暗黒の回廊の中を走っていた。

「ぐううッ?! なんて――不気味なんだっ!」

キングホッパーの複眼が白く発光する。

すると人間の数万倍の視覚能力が発動して視界が晴れ、タケシ少年は周囲の光景を確認した。

ギガエンドラスの体内は、紫色の鍾乳洞のような場所で、蠢くサーモンピンク色の天井から紫色の粘液が地面に落ち、嫌な暖かい風が吹いている。

「だけどっ……ここにいいのか――ユウト」

キングホッパーは無限に続くかのような体内を見回すと、地面から突出した岩のような肉の陰に、人影のようなものを発見した。

『侵入者発見――破壊する』

抑揚もなく、感情を一切感じさせない言葉が響く。

その声の主はギガエンドラスの体内の地平線から音も無く接近する、一体の人影――

燃え盛る炎のように上方が尖っている赤い仮面に緑色の複眼に十字のアンテナ、そして黒い装甲を纏った緑色の全身。

そして腰には、アンテナと同じ形状の十字のマークがあるベルトが装備されている。

その出で立ちはあるで、タケシ少年と同じ仮面ライダーのようであつた――

「くっっ!! 邪魔をするなッ! 稲妻ホッパーキック!」

焦るキングホッパーは大地を蹴って跳躍し、斜めに降下すると共に跳び蹴りを繰り出す。

キングホッパーは右足に雷を纏い、跳び蹴りは凄まじい電撃を纏った必殺・稲妻ホッパーキックへと強化された――

『このクロスファイヤーの力を……侮るな』

降下するキングホッパーに対し、その戦士……仮面ライダー・クロスファイヤーは大地を蹴って飛び上がり、右腕を構えた。『ライダー……パンチ』

パレートと同じく紫色の炎を纏った右腕から放たれる必殺のアップカッターはまるで天に昇る龍のように加速し、雷を纏った右足と衝突する――

「ぐああああッ?!」

クロスファイヤーの強烈な一撃に力押しされたキングホッパーは姿勢を崩して落下し、その右足は稲妻の衝撃と技の反動で装甲が砕けた。

「まだだ……この程度で負けたら北崎さんに――ユウトに合わせる顔が無いッ!!」

落下していく自分を追うクロスファイヤーを見上げ、キングホッパーは叫びを上げ、タケシ少年は歯を食いしぼる。

負けられない——こんな場所で、負けられないのだ、と。

『ナニッ——』

ユウト——その言葉に跳び蹴りの姿勢のまま追撃するクロスファイヤーは動揺し、一瞬だけ動作が鈍る。

キングホッパーは落下と共に両脚を大きく開き、その着地の衝撃を跳躍する力に変換し、再び飛翔した——

「キングホッパー・稲妻飛翔キック!!」

それはまるで稲妻が黒雲に飛翔するかのような一撃であった。

動作が鈍ったクロスファイヤーは両腕を交差させてそれを防ぐが、全身の装甲が一気に崩壊し、衝撃によりヘルメットに亀裂が走った——

『ぶがああああッ?!』

勢いを失い落下するクロスファイヤーは、初めて悲鳴を上げる。

そして地面へと思い切り衝突したクロスファイヤーはヘルメットが思い切り割れ、うつ伏せ状態で倒れ込んだ——

「はぁ——はぁ……はぁ……!どこにいるんだ——ユウトは!!」

地面に不時着したキングホッパーは膝を地面につき、息を荒げる。

そして、倒れ込んだまま動かないクロスファイヤーに近づくと、その体を仰向けに動かした——

「————!!」

タケシは思わず言葉を失い、キングホッパーのヘルメットの中で目を見開き、肩を掴んだ手を放した。

キングホッパーを襲ったクロスファイヤーの真の姿、それは――満身創痍状態の一人の少年、ユウトであった。

「誰だ……お前は――俺を知っている？」

ユウト少年は少しずつ意識を取り戻して瞳を見開き、前傾姿勢のままキングホッパーの顔を見つめた。

「タケシ――なのか？」

疲弊している様子のユウト少年は咳き込みながらもキングホッパーの顔を訝しげな表情で見つめる。

「ユウト――!!」

タケシ少年はユウト少年の表情に自分がキングホッパーに変身している事を再確認すると、キングホッパーのマスクの顎の部分に手をかけた。

「ユウト!――助けに来たぞ!もういがみ合うのはやめて早く帰ろう!――俺達の街へ!」

タケシ少年はキングホッパーのヘルメットを脱ぎ去りユウト少年を真っ直ぐに見つめ、肩に手をかける。するとユウト少年は眉を寄せてその手を振り払い、俯いた。

「俺を?!お前が――なんでだ?!俺達は――」

ユウト少年は戸惑った、自分にはタケシ少年に助けられる(理由)が無い。

タケシ少年をいじめ、そのタケシ少年にやり返され、憎しみ、いがみ合っていた関係でしかないのに、タケシ少年に助けられる事な

ど――

そんなユウト少年の言葉を、タケシ少年が遮る。

「俺達は――分かり合えないかもしれない！！だけど――だけど嫌だ！！こないがみ合ったままなんて言うのは！！」

タケシ少年はキングホッパーのヘルメットを被り、すつくと立ち上がる。

そしてクロスファイヤーのスーツに身を包んだままのユウト少年を腋に挟み、抱え上げた――

「タケシ！俺はまだ――俺はまだ納得していないんだからな！！」
叫ぶユウト少年をよそに、立ち尽くすキングホッパーは静かに頷く――

「それでも――いい」

それでもいつかは分かり合える――先ほど放った言葉とは裏腹な気持ちかを仮面に秘め、タケシ少年は闇の中を駆け抜けた。

今はまだこの化け物の体内のように闇の中だが、勇気を正しい方向にもち、歩み寄ればいつかは――
そのいつかが、いつになるのかは今のタケシには分からない。

だが、きっと分かり合える。

あの五人の戦士達の戦いを見つめ、短い間ながらも共に歩んだタケシ少年には、不思議とそう思えるのであった――

――

灰に埋め尽くされた校庭に立つギガエンドラスは焦りを隠せない様子で、大空へ飛翔する巨大な竜を見上げる。

『貴様——何者だ!! 何者なんだ!!』

飛翔した巨大な竜は太陽を背にすると緑色のエネルギーに変わり、一気に降下してホレストグリーンの体へと注入されていく——

膨大な量のエネルギーを吸収するホレストグリーンは両腕を振り上げて、獣のように吼えたげる。

するとその右腕に装備されていたワイルドクラッシャーは体に融合し、両腕の黒く鋭い三本のヒレに変質した——

「ヴォオオオオッ!!」

まるで獣のように吼えたげるホレストグリーンの頭は、トカゲのような形状へと変化し、口元にあたる部分には牙が生えた口が開かれる。

「緑獣王——フォレストワイルダー!!」

フォレストグリーンからトカゲの獣人のような姿へと究極の変身を遂げた北崎・フォレストワイルダーは両腕を大きく振り上げ、両手の爪を立てると前傾姿勢をとり、翼を広げるギガエンドラスを真っ直ぐに睨みつける。

するとその全身から緑色の波動が洩垂れ、目には見えない力場が形成された——

『何故だ——何故脆弱な人類如きが!! こうも究極の戦士に——何故だ!! 答えろッ!!』

叫ぶギガエンドラスは二枚の黒い翼を広げ、凄まじいビームをその緑の戦士へ向かって放つ。

「ギガフォレストスレエエイブッ!!」

フォレストワイルダーが叫びを上げるとその体から緑色のエネルギーが地面に放たれ、金色の輝きを放つ先端が竜の頭の形状をした無数の木々が地面から突出する――

強大なビームを受け止めた無数の木々は荒れ狂うように蠢き、一気にギガエンドラスへと加速した――

『地球人は――単純な作りの炭素生命体だったはず!! 超人もそれと変わらぬはず! なのに――何故そこまで強くなれる?! ぐううあッ!!』

全身から黒い破壊光線を放ち木々を粉碎するギガエンドラス、しかし金色の輝きを放つ無数の木々はギガエンドラスに巻きつき、一気にその巨大を締め上げた。

「分からねえだろうな! 仲間もいねえ――自分より弱い奴としか戦わねえ――そんな奴にはなあッ!!」

フォレストワイルダーは爪を立て、全身に半透明状の無数のヒレを突出させる。研ぎ澄まされた刃物よりも鋭利なヒレは内部から緑色の輝きを放ち、フォレストワイルダーは大地を蹴って飛翔すると一気に高速回転し、木々の間を暴風のように加速した――

「フルブレエイドッ!! クラアアアッシュ!!」

高速回転する刃の塊と化したフォレストワイルダーは慣性の法則を無視したかのような直角的なターンを繰り返して加速し、無数の木に拘束されたギガエンドラスの体の中心へと直撃する――

『ぐっ――だがあっ!! 人がどれほど強くとも! 俺が負けても――パレートが敗れたとしてもおおッ!!』

凄まじい緑色の光を放つ無数の刃はギガエンドラスの体に幾千、幾億、幾兆もの斬撃を繰り出す。

体到大穴を穿たれ、殆ど翼と四肢と頭だけになったギガエンドラスは断末魔の叫びを上げると一気に灰となって崩れ落ち、無数の木々と共に大爆発した――

「とうッ!!」

その爆発を背中に受けて、気絶したユウト少年を抱えたキングホッパーがギガエンドラスの体内から飛び出した――

「やりましたね――北崎さん!!」

キングホッパーは校庭の中心に立つと等身大のサイズに変化し、ヘルメットを脱いでフォレストワイルダーを見つめた。

「へっ! あたぼうよ――」

校庭を埋め尽くしていた蠢く竜の頭の本々は緑色の輝くエネルギーに変換されフォレストワイルダーの体内に戻る。

するとフォレストワイルダーはすっと立ち上がり、地獄からの

生還を果たしたキングホッパーに向かって親指を上げた―

「だけど、ちょっと……無理し過ぎたわ――」

フォレストワイルダーはよろよろとふらつくと、仰向けに大地に倒れて変身が解除され、静かに瞳を閉じた。

自分の命を掛けてでも守りたい少年や、仲間達を守りきった安心感に、そして究極の進化の反動により、北崎の意識は一気に遠のいていく――

自分の名を呼ぶ熾烈戦隊の三人の戦士達の叫び声と、タケシ少年の呼ぶ声だけが、全裸状態で意識を失った北崎の耳に届いていた――

第二話 第二部 ―再会―（後書き）

作者「いやー！パワーアップしましたね北崎！というか皆さん！あけましておめでとうございます！」

アイン「あけましておめでとうございます！」

作者「今年でリベンジャーも祝！三周年！皆さんこれからもリベンジャーを宜しく願います！」

アイン「俺も早くパワーアップしたい！というか俺の戦闘シーンを出せやい！というか俺の必殺武器は？特殊能力は？！」

作者「ごめん――忘れがちな、だけど――最後あたりでアインにはかなりいいシナリオを用意してるから安心して」

アイン「やったぜい！さすが作者！」

作者「最初に言っておく――！俺は空気キャラには優しい――！」

アイン「やっぱりくたばれ！くたバレーボール！」

第二話 第三部 ―決着―

街は白い光に包まれ、その眩しさに全ての物体の輪郭がぼやけて見えなかった――

一度敗れても何度でも立ち上がる男・不堂断児が変身する最強形態バーニングファイヤー。

そのバーニングファイヤーが最強必殺武器・エレメンタルリベンジブレイカーを以て打ち込む究極無比・空前絶後の必殺技・アルティメットリベンジスラッシュ。

全ての宇宙を支配し、支配した幾兆の星人・怪獣・存在を以て次元の狭間から襲いくる悪意・パレート。

そのパレートのギガバニッシュユカリバーによる極限まで高められた無数の次元すら切り裂く究極必殺技・ギガエンドデスバニッシュ――

究極と究極の力がぶつかり合った街中の交差点は7メートルほどの深さの巨大なクレーターが形成され、砕けた地面からはエネルギーの余波に乗って金色の粒子が漂っていた――

「……………」

『――』

そして、クレーターの中心で、無数の傷や黒い焼け跡の残るバーニングファイヤーと、全く無傷の赤い体をもったパレートの二人が立ち尽くしていた。

周囲を照らす眩い光は消失を始め、パレートの視界に、ようやく目の前に立つバーニングファイヤーの輪郭が見えてきた――

『バーニングファイヤー……不堂……断児——』

「……」

パレートは直立不動のままバーニングファイヤーに向かって話しかける、とても静かで、重々しい口調であった。

バーニングファイヤーは既に人間態へと戻りつつある拳を握りしめる。1リットルほどの血が、その全身から流れ落ちていた――

『まさかここまでとは――ぬうがああああッ!!』

ヒステリックに叫ぶ無傷のパレートは震える両腕を振り上げて太陽を仰ぐ。

そしてバーニングファイヤーを睨みつけ、目を輝かせた。

『ぐううッ!ぬううッ!ぐおおおおッ!』

無傷であったはずのパレートの体から金色と銀色に輝く放射線状の光が放たれる、その光はパレートの赤い体を蝕んでいく。

そしてパレートの体は虹色の輝きを放ち一気に光の粒へと変換され、一気に大爆発を起こした――

「勝……た……」

満身創痍のバーニングファイヤーは変身が解除され不堂断児へと戻る。

すると彼はエレメンタルリベンジブレイカーを地面に突き刺し自分の体を支えながら爆風が渦巻く大地に静かに膝をつき、一気に前のめりに倒れた――

(ゆい……俺はやったぞ……終わったんだ……全ての戦いが——)

クレーターの真ん中に倒れた断児は久しぶりに妹の名を心の中で呟くと、力無く寝返りをうちアスファルトの上に大の字に寝る。

そして彼は、真っ白い雲が少しずつ流れていく空を見上げた。

あまりにも絶大な力を消費したのか断児の意識は、急に遠のいていく——

「…これで——平和な世界が始まる………」

安心しきった断児は少しだけ微笑みながら瞳を閉じると、彼が倒れているクレーターを中心に金色の風が吹いた。

真冬の冷たい空の太陽は雲によって隠れ、ちらほらと街中には雪が降っていく——

今年最後の雪が降ったこの日、熾烈戦隊はギガエンドラス、そしてパレットを打ち破り、地球を脅かす驚異に勝利したのであった——

【次回予告】

熾烈戦隊はパレットに勝利し、平和な地球・東京都24区に正月がやって来た。

新しい年を平和と共に迎えたりベンジャー達は基地内で過ごし。少年達は初詣へと向かった——

「あけまして——おめでとうございます!——」

【次回 熾烈戦隊リベンジャー「R」】

【第三話 正月、それは寝正月――】

久方振りの、戦士達の休息――

第二話 第三部 ―決着―（後書き）

作者「皆さんあけましておめでとうございます！って前回言ったっけか……」

アイン「確か言ったな、確か」

作者「そろそろかな、そろそろ」

アイン「ん？どうした？」

作者「次回作予告、熾烈戦隊リベンジャ―もあと五話か四話あたりで終わりなんで」

アイン「え……それはなんか感じてたが――次回作予告を？ここで？」

作者「うん、では始めたいと思います」

アイン「えっ？！ちょ――！」

次回作【特急戦隊バトルライナー】

2006年 電獣戦隊ボルトマン
2007年 熾烈戦隊リベンジャ―

そして今年2008年―――特急戦隊バトルライナー発進！

超古代特急文明の力を受け継いだ現代の若者達と、封印を解かれた
邪悪なるギゾンド一族の戦い！

『グジミリヲ！ヘジン！』

ギゾンドベルトを使用し獣人へと姿を変える超古代の改造人間であ
るギゾンドに対し、バトルライナーは古代の超特急の力で変身する
！！

「特急変身―――アールコード！！」

輝く特急武装、時を越えて戦う超特急戦士。

迷いながらも戦う主人公達を、待ち受ける運命や如何に――

作者「以上、予告1です」

アイン「こういう場所で予告ってどうなのよん……」

作者「皆さん、特急戦隊をよろしくお願いします！熾烈戦隊も最後
までよろしく願います！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2504c/>

熾烈戦隊リベンジャー [R]

2010年10月10日16時59分発行